

# 日本ロシア文学会 関西支部 会報

発行 日本ロシア文学会関西支部事務局  
 住所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町  
 京都大学大学院 人間・環境学研究科 服部文昭 研究室  
 電話 075-753-6732 Email hattori.fumiaki.4x@kyoto-u.ac.jp  
 郵便振替口座 00960-2-48831 日本ロシア文学会関西支部

## ◎秋季総会・研究発表会の報告

2018年12月8日(土)、京都大学(総合人間学部)において関西支部の秋季研究発表会ならびに総会が開催されました。

### 研究発表会

(1)報告者:大平 陽一 氏

題目:プラハ国民劇場の亡命ロシア人ダンサー

司会者:小川 佐和子 氏

(2)報告者:占部 歩 氏

題目:ペレーヴインとカルヴィーノ

—可能性の網の目としての空虚な場所—

司会者:中村 唯史 氏

◇特別講演◇ 国松 夏紀 氏

題目:ドストエフスキー『悪霊』から削除された／入らなかった1章

“У Тихона”(「スタヴローギンの告白」)のテキストを巡って

### 支部総会

(1)会員の異動(敬称略)

入会:なし

退会:松本賢一

逝去:小檜山愛子

河合忠信(3年ほど前に逝去されたが、この度、奥様から事務局に届けられた)

会費滞納による資格停止(会員):

平田真也、宮本友介

会費滞納による退会(会友):森光広治

### (2)決算案と予算案の承認

資料に基づき事務局から説明があり異議無く承認された。

### (3)支部規約の改正

支部長からの提案の通り異議無く承認された。

### (4)日本ロシア文学会の報告

・日本ロシア文学会の次回定例総会・研究発表会は、早稲田大学戸山キャンパスで開催される。

・台風・震災などによる日本ロシア文学会会費免除に関して、関西支部からの申請は無かった。

・日本ロシア文学会の財政状況の説明があり、会費納入率の一層の高まりが期待される。

### (5)次期開催校の決定

関西大学にて、2019年6月に開催と決定された。

### (6)選挙管理委員の承認

有宗昌子氏、菱川邦俊氏が異議無く承認された。

◇その他に支部長から、以下のような趣旨の発言があった。

「日本ロシア文学会でも各支部においても、現在、修士課程の院生の入会が少ない状況である。ところが、博士課程での奨学金などの獲得に際し「業績」が必須な趨勢になっており、そのことから、今後は、修士課程の院生の学会加入を積極的に勧誘してはどうだろうか」

これを受けて、「修士課程の院生が加入した場合に、その発表の場を設けるなどの具体策も必要であろう」等の意見も出され、引き続き検討を続けることとした。

### ◎日本ロシア文学会理事会報告(支部長)

#### (1) 2019年度全国大会の開催について

すでに10月の総会で承認されたところではあります。来年度は早稲田大学戸山キャンパスで、10月26(土)―27(日)の二日間、開催されます。10月25日(金)にはプレシンポも開催の方向です。報告やパネルの募集要項は、例年通り4月末～5月初めに学会ホームページに掲載される見込みですので、ご留意ください。

#### (2) 2019年度大会組織委員会、実行委員会の顔ぶれについて

両委員会の構成が、以下のようになることが承認されました。

##### ・大会組織委員会

中村唯史(委員長)、諫早勇一、恩田義徳、坂庭淳史、楯岡求美

##### ・大会実行委員会

坂庭淳史(委員長)、安達大輔、貝澤哉、鴻野わか菜、楯岡求美、八木君人

#### (3) 事務局体制の分担について

事務局の業務が増えていることに鑑みて、二人体制になることが10月の総会で承認されましたが、その具体的な分担が今回の理事会で認められました。

【書記】安達大輔 【庶務会計】野中進

#### (4) 若手ワークショップについて

今年度から始められた新しい制度ですが、採択された企画が2019年3月までに開催されることに鑑み、一度総括をしたうえで新たな応募を開始すべきなので、次年度は募集を当面のあいだペンディングにすることが、三谷会長から提案され、承認されました。

#### (5) 国際交流助成について

国際学会等での報告に関する助成(上限5万円)、公開研究会・(ミニ)シンポジウム等の実施に関する助成(上限2万円)に対する申請を、2019年5月31日を〆切として募集することが提案され、承認されました。募集の詳細は、まもなく学会のホームページに掲載される予定です。皆さん、ふるって応募ください。

### ◎支部事務局からのお願い

・春には次期の支部長などの選挙が実施されます。転居などの際には、どうぞ、支部事務局にも「新住所」をお知らせ下さい。

・円滑な支部運営のために、会費の納入もよろしくお願いいたします。

郵便振替口座 00960-2-48831

日本ロシア文学会関西支部

\*次ページ以下に、研究発表要旨ならびに特別講演の要旨を掲載しています。なお、特別講演講師の国松夏紀氏については、

[https://www.andrew.ac.jp/soken/pdf\\_5-1/bunka8.pdf](https://www.andrew.ac.jp/soken/pdf_5-1/bunka8.pdf)

もご覧下さい。

## プラハ国民劇場の亡命ロシア人ダンサー

## ——戦間期プラハの亡命ロシア文化と同化について——

## 〈要旨〉

大平 陽一（天理大学）

本報告では、戦間期にプラハ国民劇場バレエ団のプリマ兼コレオグラファーとして活躍しながら、第二次大戦後はその名に言及することが憚られるようになったエリザヴェータ・ニコリスカヤの生涯を紹介することを通じて、ロシア革命と内戦によって祖国を捨てざるを得なかったロシア人芸術家たちが直面した「同化」の問題について考えてみたい。

## 1. 経済難民か政治亡命者か：プラハのロシア人ダンサーたちの対独姿勢

戦後長らくニコリスカヤがチェコ・バレエ界においてある種の恥部として無視されてきたのは、彼女が利己的な目的のためなら当時チェコを支配していたナチスに阿ることも辞さなかったからだ。例えば、ドイツ、イタリアへの巡業を実現すべく当局に提出された請願書には、臆面もなく「偉大なドイツ兵の慰問のために私たちが必要とされるのでしたら、それをたいへんな名誉とし、誇りをもってお役に立つ所存です」と書かれていた。政治的信条など持ち合わせぬ彼女は、ほとんど「経済難民」のように、サバイバルのため、自身の成功のためなら手段を選ばなかったのである。

これに対して、彼女のパートナーとして踊った二人のロシア人舞踏家は、ナチスに対し、「難民」ではなく「政治亡命者」として振る舞ったように見える。オデッサ生まれのヴァディム・バルディンも、ナチスに対して協力的ではあったが、栄達だけを目的としたニコリスカヤとちがって、自らの政治的信条に基づいた上での対独協力だった。ソ連嫌いの「亡命者」バルディンは、ソ連がドイツに倒されれば、かつてのロシアが復活するのではないかと期待し、ドイツ軍と共にソ連国内に入って通訳として協力したのであった。

しかし、ボリシェビキ政権を認めないが故に出国した亡命者の間でも、バルディンのような対独協力者は少数派であった。多くの亡命ロシア人にとっては、ソ連に対する憎悪よりはロシアへの愛国心の方が勝っていた。こうした政治態度は、キエフ生まれの舞踏家ドミートリー・グリゴロヴィチ＝バルスキーの対独姿勢に見ることができる。ニコリスカヤに見いだされ、パートナーまでつとめたグリゴロヴィチ＝バルスキーは、42/43年シーズンを最後にレジスタンスに参加し、43年暮れにゲシュタポに逮捕されている。

実の所、「第一波亡命者」と呼ばれるロシア人の実態は、今日のシリア難民と選ぶところはなかった。だからこそ国際難民機関が支援の手を差し伸べたのである。しかし、難民機関の予想に反して、大部分のロシア「難民」は、内戦終結後も故国に帰ることもなければ、受入れ国に同化することもなく、「在外ロシア」という国土を持たぬ共同体を作った。彼らには、「政治亡命者」という自負があったからである。バルディンとバルスキーの振る舞いは正反対のようだが、その行動は亡命者と

しての政治意識に由来するものであり、亡命ロシア文化にコミットすることなく、プラハ国民劇場における成功だけを目指したニコリスカヤの「難民的」とも形容できそうな処世術とは本質的に異なっていた。

つまるところ、「在外ロシア」という領土のないもう一つのロシアを成立させたのは瘦せ我慢にも似た使命感、革命前の「真のロシア文化」を守り伝えるという使命感にあった。そして、その亡命ロシア文化は、国民性がはっきりあらわれた言語文化的性格が強調されていた。

## 2. 亡命文化の言語的性格：ニコリスカヤとゲルマノフ：

ニコリスカヤの場合、彼女が言語表現を必要としないバレリーナであったことがチェコ文化への同化を容易にしたと思われる。そうした推測は、同時期に在外ロシアで活動した女優のゲルマノフとの比較で明らかになる。なぜならゲルマノフの挫折は、「亡命演劇」と言語をめぐる困難の反映であり、あくまで「ロシア語」の演劇にこだわった——ということは「同化」を拒否した——舞台俳優は、「亡命文化」の担い手という使命に殉じるほかなかったのである。

それに対して、舞踏家ニコリスカヤの芸術的経歴は、言語が本質をなさぬ芸術的表現は受入国の文化に同化し得たという事実を、同化はしばしば物質的な幸福を獲得する手段となりえたという事実を、雄弁に物語っている。

## 3. ムサートフ：亡命文化としての絵画

亡命作家や亡命劇団はあり得ても、亡命バレエや亡命画家は存在し得ないように思われる。後者の非言語的な芸術表現は、文学や演劇よりも異文化への同化が容易いからにほかならない。しかし、亡命者との意識にこだわった画家が存在しなかったわけではない。戦間期チェコでそれなりに認められた画家グリゴリー・ムサートフは、そうした例外に属するように思われる。ボヘミアに移住した彼が、チェコ人画家のグループに受け容れられるために描いたのは、どれも記憶の中のロシアを描いた絵だった。チェコの芸術界に受け入れられることを切望しながらも、彼はロシア的主題にこだわり、いかにも「亡命ロシア人」らしく、回想の中のロシアを描き続けてきたのである。ドストエフスキーのチェコ語訳作品集のための挿絵が彼の代表作となったのは、偶然ではない。

しかし、それは亡命画家としてムサートフが振る舞えたのは、意識にのぼせることのできる主題のレベルまでであった。だからこそ、亡命ロシア社会の無理解に直面した後、ムサートフの絵にチェコの風景が描かれるようになり、画家自身もチェコスロヴァキアに帰化したのであろう。ただ、彼の作人の中にはからずも感じられる「ロシア的」なものが、エキゾチックな魅力として、チェコ人に評価される一因となったのも、また否定しがたい事実はないだろうか。

日本ロシア文学会関西支部 2018 年度秋季総会・研究発表会

2018 年 12 月 8 日

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程 占部歩

ヴィクトル・ペレーヴィンの長編『チャパーエフと空虚』(1996)とイタロ・カルヴィーノの中編小説『見えない都市』(1972)を「ヴァーチャルな場所」という観点から比較分析した。これら二つの小説にはそれぞれ「内モンゴル」と「ヴェネツィア」という場所が、中心的な表象として登場する。しかしそのどちらも、具体的な場所として描かれるのではなく、そこから場所や都市のあらゆる形態が引き出されるいわば「雛型」とされている。これは、アルゼンチンの作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスの掌編『八岐の園』(1951)において描かれる同名の架空の小説に着想を得ていると考えることが出来る。この小説はストーリー展開のあらゆる可能性を胚胎するとされ、それゆえ実質的に無限の時間を内蔵するものであるとされている。カルヴィーノは自身がアメリカで行った文学講義でこの小説を取り上げ、「無限の可能性の網の目」と称しているほか、「知性によって構築され、それに支配される世界としての文学の概念を認めた」作家として、ボルヘスに多大な影響を受けたことを語っている。ペレーヴィンはボルヘスからの文学的な影響を明言してはいないが、『チャパーエフ』の序章に『八岐の園』のロシア語タイトル「Сад расходящихся тропок»をもじった『八つ岐ピョートルの園』«Сад расходящихся Петек»という文言が見られること、またデビュー当初に、架空の人物について書かれた伝記という、ボルヘスが得意とした形式を取り上げた『マルドゥングたち』«Мардунги»という短編を執筆していることから、両者の間に一定の影響関係を見て取ることが出来る。

そこで本発表では、ボルヘスの提示した「無限の可能性の網の目」という概念を、ペレーヴィンとカルヴィーノの作品の分析に適用し、ボルヘスの描いた時間的無限ではなく、形態の雛型としての空間的無限という視座を提示しようと試みた。すなわち、内モンゴルとヴェネツィアという二つの場所を無限の雛型としての空虚な場所として捉え、そこから導き出される一般的な性質について考察した。空虚な場所とは、実在する場所、すなわち登場人物たちが自己を見出しそこで様々な体験をするための現実的な基盤としての場所ではなく、言葉の上でしか認識することの出来ない、抽象的な場所を指すものである。作中ではそのような場所は、それを認識する存在によって様々な形態を取る、極度に観念的なものとして表象されている。そして物語の結末に至っても、その場所がどのようなものであるかという説明は読者には与えられない。発表ではそのような抽象的な場所を、理論的に基礎づけることを目指して考察を行った。

分析に当たっては、フランスの哲学者ピエール・レヴィが唱えた「ヴァーチャル化」という概念を援用した。これはジル・ドゥルーズらの思想の系譜に連なるものであり、一般的にいわれる「模造の、偽物の」といった意味ではなく、その可能性としての形態に重点を置いた観点である。すなわち、ヴァーチャルという概念は真実の対義語としてではなく、具体的に把握可能な形で表象されているという意味でのアクチュアルという概念に対応するものとされているのである。レヴィはヴァーチャルを「豊かで力強い存在の様態であり、創造の過程において遊びを与え、将来を拓き、直接的な物質の凡庸な現れの下に意味という井戸を掘るもの」と説明している。また、彼はヴァーチャル化を「脱領土化」と「メビウス効果」という二つの言葉を用いて論じている。前者は目の前の具体的な事象を離れ、「今ここ」からの脱出を引き起こすものであり、後者はメビウスの輪のように内面と外面の関係を解体する効果を示すものである。これらを先ほどの空虚な場所の分析に適用する

ことにより、抽象的、観念的なものであった内モンゴルやヴェネツィアという場所を、理論的に考察した。すなわち、上記の二つの観点が作用することにより、空虚な場所はヴァーチャルな場所、いわばヴァーチャルスペースとして表象されることとなり、無限の可能性を自身の内に内在させることとなったのである。具体的にいえば、作中での内モンゴルとヴェネツィアは、そのモデルとなった実在の場所との結びつきを喪失(脱領土化)し、本来それに与えられている地理的限界を超えて作中に描かれるあらゆる具体的な場所を演繹するための雛型としての性質を帯びた(メビウス効果)ことで、無限という新たな価値を獲得したといえるのである。

重要なことに、それぞれの場所はポジティブなものとして作中で表象されている。内モンゴルは複数の世界の狭間で放浪する主人公が辿り着くべき目的地として、ヴェネツィアはそこから演繹される架空の都市を次々と物語ることによってしか繋ぎ止めることの出来ない故郷として、すなわちかけがえのない価値を持つものとして描写されている。このポジティブな価値づけは、特にペレーヴィンの作品を考察する場合に大きな意味を持つ。というのも、彼の作品の背景にはソ連の崩壊という未曾有のカタストロフがあり、内モンゴルという場所への到達はその喪失感の超克という意味合いを持つと考えることが出来るからである。カナダの現象学者エドワード・レルフは、帰るべき場所(Home)が人間のアイデンティティに与える影響について論じており、あらゆる場所は自身のアイデンティティを持ち、そこに帰属する人間の自己認識にも大きな影響を与えることを指摘している。

ここから考察できるのは、無限という性質を備えたヴァーチャルスペースは、ある場合においてはその性質をポジティブな価値へと転化させることが出来、それによってアイデンティティの保証という作用を持つことが出来るということである。それは特に、ペレーヴィンの『チャパーエフと空虚』においては、内モンゴルというヴァーチャルスペースを目指す主人公の冒険という形式をプロットに持たせることによって、探求の旅と主人公のアイデンティティ形成の過程を二重写しに描写することが出来るという機能を持つといえる。このように、内モンゴルという観念的な表象をヴァーチャルな場所として捉え直す観点が示されたことによって、キャリア初期のペレーヴィンのキーワードとされ、多くの場合東洋思想との関連において論じられてきた「空虚」という概念を、より具体的に考察する可能性を示すことが可能となったといえるのではないだろうか。

## 【特別講演要旨】

## ドストエフスキー『悪霊』から削除された／に入らなかった 1 章

## “У Тихона”

(「スタヴローギンの告白」)のテキストを巡って

国松 夏紀(桃山学院大学 名誉教授)

永く生きていくとそれなりの効用があるもので、順調にいけば東京オリンピックを2度経験することになる。前回 1964 年の際は偶々高校が国立競技場の近くにあったので、燃え上がる聖火を眺めつつ通学したものです。加えて、本日お話をさせていただくのも年の功、昨年満 70 歳本年 3 月末定年退職致しました。講演の機会を与えて下さり感謝します。

団塊の世代とか言うのが一番判り易いかも知れません。人数が多いのではみ出したり割り込んだり。大学に入っても前後上下関係はかなり混沌状態。2 歳年下の村上春樹は大分遅れて入学した小生の同窓の先輩となりますが、なんと卒業年次は同じ 1975 年、キャンパス内ですれ違ってもおかしくないめぐり逢わせです。

## めぐり逢い・すれ違い

早大文学部戸山キャンパスにおける春樹と夏紀との遭遇はともかくも、同時代のドストエフスキー(1821-1881)、シュリーマン(1822-1890)、ノーベル(1833-1896)三者のドストエフスキー通りでのすれ違いを想定するのは興味深い。年譜を突き合せるとわずかに共在する年月が見える。文学創造、古代遺跡発掘、ダイナマイト発明・油田開発と活躍分野は重ならずとも、後発資本主義社会で「金！金！金！」の日常生活は共通するだろう。

少し三題噺めくが、大黒屋光太夫(1751-1828)、山下りん(1857-1939)、二葉亭四迷(1864-1909)の取り合わせなどはどうだろう。漂流民光太夫は帰国嘆願のため祖国と逆方向に邁進せざるを得なかった。西欧ルネサンス絵画に魅了されたりんはイコン修得を命ぜられていた。「文学は男子一生の仕事にあらず」と称した二葉亭の業績はやはり文学以外の何もでもない。等々ロシアに係わると本意との矛盾を強いられる？ 不本意の系譜？

ただ、丸谷才一(1925-2012)「樹影譚」、藤沢周(1959- )「比良」、ドストエフスキー「カラマーゾフの兄弟」と並べ比べてみたのは、少し違う意図であった。各作品に三重連、惑星直列、一般的に或る物事の重層化による真実の開示(Eureka!)が顕著なのです。

## 「Heimat」

少し前置きが長くなるが、1973年から76年、学部後半から大学院にかけて6号継続したこの研究同人誌を逸することは出来ない。今や伝説となった、ミハイル・バフチン追悼(小)特集を組んだ唯一の雑誌である(第5号)。バフチンを含め皆がここから出て来た。かつて、ドストエフスキーが「皆ゴーゴリから出た」と言ったように。印刷・製本は中野刑務所に委託して通常よりは安価に出来た

筈だが、個人負担分を捻出するのは過酷であった。

それはともかく、バフチンに関しては、「著作目録」のロシア語原版のタイプ打ち(ワープロ以前の時代である)、論文「可能性をより大胆に利用せよ」の翻訳点検くらいしか顔を出していない(この翻訳は水声社版「著作集」の小生担当分となり、長く尾を引く)。

むしろ小生が注力したのは「ギリシア紀行」の連載で、3回続いた。3回生の夏のソ連からギリシア、アテネまでの旅を綴った。それは現在のアトスへの思いに連なり、例えば、中西裕人『孤高の祈りギリシャ正教の聖山アトス』(2017、新潮社)等に触れると再燃する。

その他は、「展覧会評」を2回、絵画等に対する関心も持続するし、これも例えば、「B. B. Верещагин とは何者か？」を論じたりするに至る。

Heimat は故郷、ロシア語なら *родина*、皆のふるさと、とはいかにも出来すぎの感があるのだが、我ながら不思議なのはドストエフスキーが見当たらないことだ。読んではいたのだが、卒論に取り掛かるまで、ドストエフスキーは潜行していたのかも知れない。

以下本題である。年表形式にコメントを加え、小生の反応・対処を□で囲う。

**1869年11月** 「ネチャーエフ事件」。作家は、イワーノフ殺しを題材に構想を練る。

百年後の読者は、身近に起きたリンチ事件と重ね合わせ強い印象を刻み込む。黙示録の呪縛は読者をも捉え、そのポジショニングをも拘束する。先回りして言ってしまうと、温いスタヴローギンの位置取りは、この章と『悪霊』本編との関係性に重なる。

**1871年1月** 『悪霊』連載開始(『ロシア報知』)

同年末～翌年下旬 『悪霊』第2部を締め括る章“У Тихона”(スタヴローギンの告白)を巡るトラブル。編集部の削除要求に作家巻き返しの努力。原因は「少女凌辱」の場面その他。

**1872年11月、12月** 『悪霊』第3部発表、『ロシア報知』連載完結。

\* “У Тихона” の章は復活せず。

**1873年** 自前で単行本『悪霊』刊行の際も復活せず、その後、関係資料行方不明(夫の名誉をまもるためアンナ夫人が筐底に納めていたのでもあろうが)。

\*この経緯の検証は進んでいる。読み返すと、編集部は当初から掲載の意思はなく、ただ連載完結の必要から作家に対して可能性があるような思わせぶりをしたとも見える。さらにアンナ夫人のガードは堅い。

**1905年** 未亡人アンナ・グリゴリーエヴナによる筆写本、部分的に公刊。没後25年記念全集第8巻『悪霊』巻末付録として。チーホンがスタヴローギンの「告白文書」を閲読に掛かる所まで。ちなみにこの版は旧正字法。**1996年夏**、ペテルブルクの本屋で発見・購入。

**1918年** アンナ夫人、ヤルタで死去。現地に埋葬。(50年後、1968年、ペテルブルクの夫の墓に合葬)。

1921年(生誕100年記念の年)、“У Тихона”の章の「источник(典拠)」がモスクワとペトログラードで相次いで発見される。『ロシア報知』1871年12月号掲載に向けて組版された校正刷15葉、そこには削除回避のための作家の試行錯誤が書き込まれている。これがモスクワ。ペテルブルクでは、アンナ夫人の筆写本が発見された。以後、“У Тихона”の活字化・公刊は、基本的にはこれらの資料を典拠とする。【詳しくは、30巻全集XII参照】

1922年、上記典拠による公刊・活字化のうち次の2点は、早大図書館所蔵

1975年、学部卒業論文執筆に当たり使用したテキスト。

Документы по истории литературы и общественности, вып. 1, Изд. Централхва, М., 1922, стр.3—40. 及び

(以下、現物は旧正字法)Ф. М. Достоевский. Исповедь Ставрогина. Три ненапечатанные главы из романа БЕСЫ. Alle Rechte vorbehalten Copyright by Orchis・Verlag. München. 1922.

1926乃至1927年 トマシェフスキー、ハラバーエフ編文学作品全集第7巻『悪霊』付録

Ф.М.ДОСТОЕВСКИЙ. Полное собрание художественных произведений. т.VII БЕСЫ. Приложение. Ненапечатанная глава “У Тихона”. Редакция Б.Томашевского и К.Халабаева. М., Л., 1926(1927). \*表紙には1926年、中扉には1927年とある。極めて評価の高い刊本であるが、全集自体は完結に至らなかったという(東大駒場図書館蔵)。

そしていよいよ

1971年の生誕150年を記念して30巻全集の刊行開始(1972~1990)

Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений : В 30т. Т.I—XXX. Л.,1972—1990

とりわけ глава “У Тихона” の全面的解説に力を入れている。

《校正刷加筆訂正》Правка на гранках ...Полностью печатается впервые...

30巻全集当該のXI、XII巻は1974、75年の刊行、入荷は多少遅れたが、かえって修士論文の作業時にはその検討が必須となる。何が明らかになったのか、明らかにする。

修士論文からほぼ20年、ようやくその源泉に向かい合う。

1996年半年のサバティカル モスクワのアルヒーフで《校正刷》現物と30巻全集XI、XII所載の глава “У Тихона” 関係資料(コピー)との比較対照・解説校閲。

同年 ペテルブルクのロシア文学研究所でアンナ夫人の筆写本全冊コピー。7月夏季休暇に入り 閲覧不可。

モスクワ古文書館での感激を込めてナウカの「窓」100号記念アンケート《思い出の3冊、私の書棚から》に答える形で3冊目「ドストエフスキイ『悪霊』に入らなかった一章「チーホンのもとで」(ロシア国立古文書館蔵)(ロシア語原文表記略)通常の本とは異なるが、濃紺の固く厚い表紙のノート・ブックに、アンナ夫人の手によってキッチンと折り込んで貼付された、作者自身の夥しい書き込み

を含む十五葉の校正刷りは、一種本の如くで」。 (97.3月)

2004年 Д18. Воскресенье 版 18 卷全集第 9 卷『悪霊』付録

ДОСТОЕВСКИЙ Ф.М. Полное собрание сочинений: В 18т. Т.9. Роман “Бесы” (1871--1872).---М.:Воскресенье, 2004. ---640 с. : ил.

《校正刷》Часть вторая Глава I У Тихона. <Первая редакция. Гранки «Русского вестника»>

Гранки печатается по тексту, который хранится в РГАЛИ: Ф.212.1.10.

《書き込み》は何処へ？ 不思議なことに、肝心の《書き込み》に関しては言及がない。

《アンナ夫人筆写本》ГЛАВА ДЕВЯТАЯ У Тихона. <Вторая редакция. Список А.Г.Достоевской>

Список печатается по рукописи А Г. Достоевской, хранящейся в Институте русской литературы РАН Ф.100, №19443. СССРХб.

\* 印象として、資料の位置付けが昇格したような。これまででない Вторая редакция！という表記にその表われを見る。作家と夫人は創作現場でも良きパートナーであったではないか！

《校正の写し》< СПИСОК ПРАВКИ Ф.М.ДОСТОЕВСКОГО НА ГРАНКАХ 《Русского вестника》подготовленный А.Г.Достоевской >

Список гранок публикуется впервые по рукописи А Г. Достоевской, хранящейся в Институте русской литературы РАН Ф.100, №19443. СССРХб.

\* 残された最後の未開拓領域、最後の活字化か？ 筆写本と同ファイルの 10 ページ余の紙葉があつて、何だろうと思っていたもの。これも活字化されたということだろう。その位置付けはなお検討の余地がある。

2010 年秋 モスクワのアルヒーフ、「校正刷添付ノートブック」閲覧不可、代替えに CD 版。

2011 年春 ペテルブルクのアルヒーフは《アンナ夫人筆写本》閲覧可。上記 18 卷全集第 9 卷の活字化検証。活字化脱落箇所発見？ 筆写本と同ファイルの紙葉 (14p.) の謎、解明？

2012 年 カノン版(旧正字法)全集の興味深い措置。 глава“У Тихона”を含まない『悪霊』と同じ第 9 卷の付録として、 глава“У Тихона”を含む『悪霊』とさらに глава“У Тихона”の三種の資料をも添付する。これ以上の刊行形態はないのかも知れない。

2018 年 30 卷全集の増補,改訂版(35 卷全集)は、第 6 卷『罪と罰』が入荷したところで、中断中... 新たな発見を期待しているのではあるが...